

7)伝染性紅斑

(定義) ヒトパルボウイルスB19の感染による紅斑を主症状とする発疹性疾患である。

令和4年の伝染性紅斑は、小児科定点医療機関から40人(累積定点当たり報告数0.75)の報告があり、令和3年(53人)より13人少なかった。年間で第43週(0.15)が最も高値で、令和3年、令和4年と2年連続で報告数が減少した(図2-7-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.5倍で推移し、全国はほとんどの週が基線付近で推移していた(図2-7-3)。保健所別では、始良、鹿屋、鹿児島市の順に(図2-7-2)、年齢別では、1歳(25.0%)、2歳(22.5%)、6～11ヶ月(12.5%)の順に多かった(図2-7-4)。

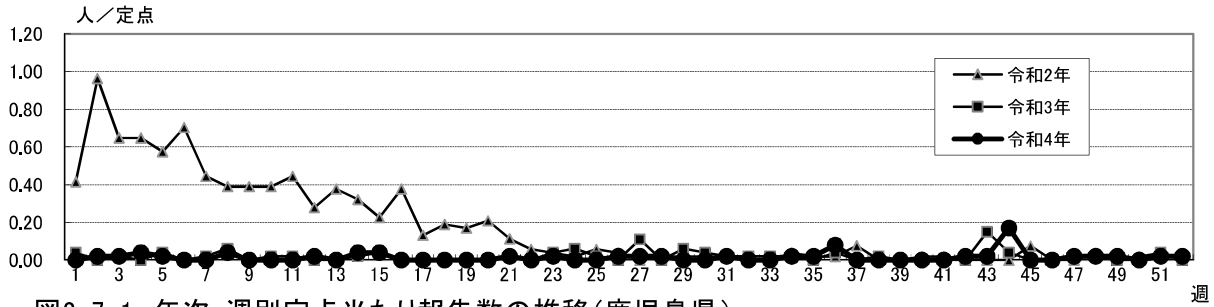


図2-7-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

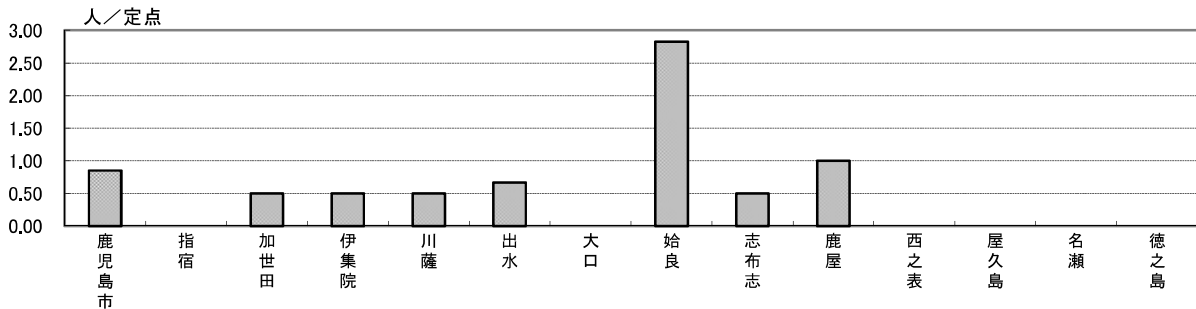


図2-7-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

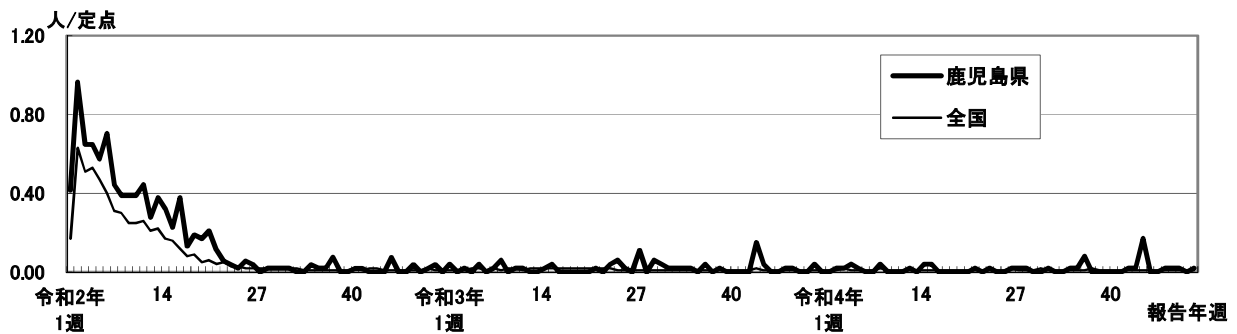


図2-7-3 定点あたり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

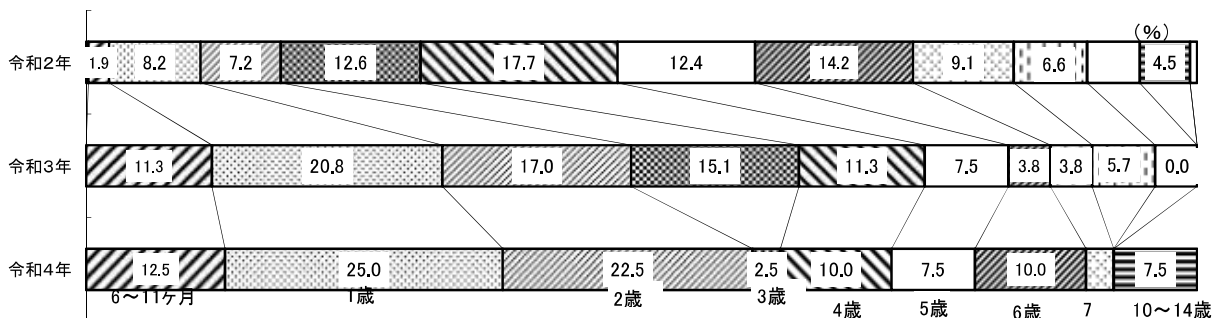


図2-7-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

8)突発性発しん

(定義) 乳幼児がヒトヘルペスウイルス6、7型の感染による突然の高熱と解熱前後の発疹を来す疾患である。

令和4年の突発性発しんは、小児科定点医療機関から1009人(累積定点当たり報告数18.95)の報告があり、令和3年(1115人)より106人少なかった。年間では第17週(0.68)が最も高値であった(図2-8-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.1倍とほぼ同レベルであった(図2-8-3)。保健所別では、鹿児島市、鹿屋、始良の順に多く(図2-8-2)、年齢別では、1歳(57.1%)、6~11ヶ月(27.9%)、2歳(9.7%)の順で、1歳以下が全体の約86%を占めた(図2-8-4)。

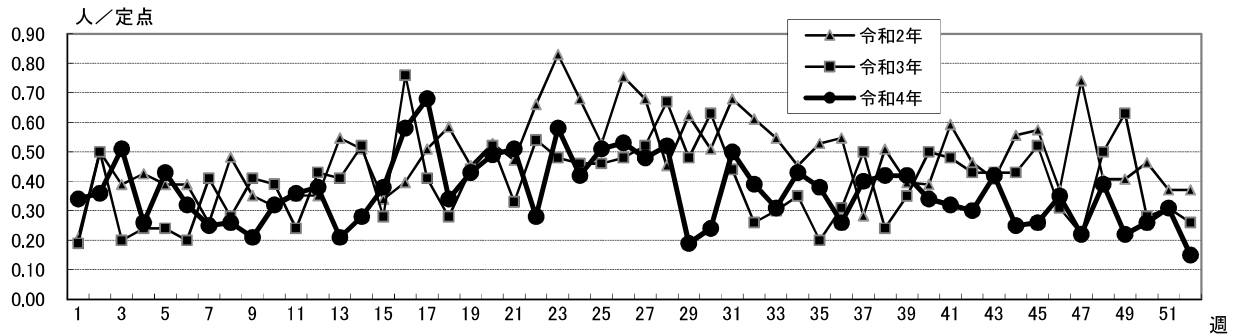


図2-8-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

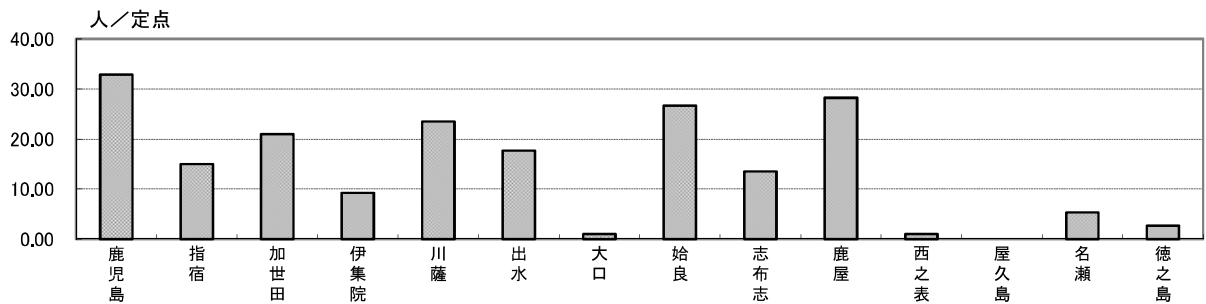


図2-8-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

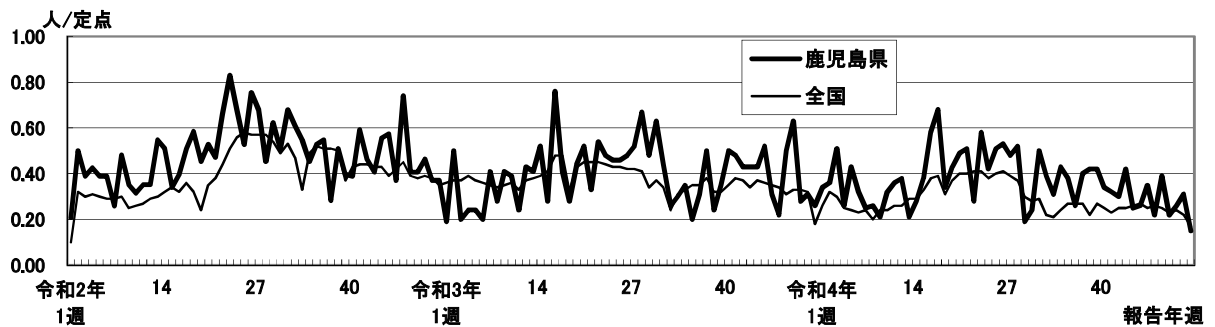


図2-8-3 定点あたり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

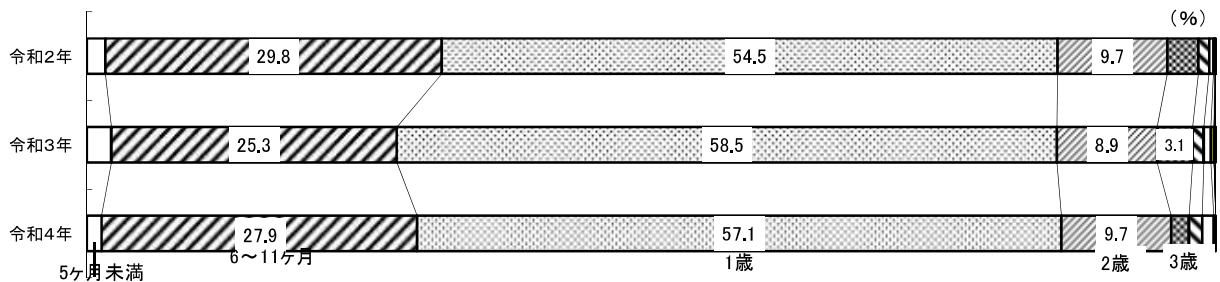


図2-8-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

9)ヘルパンギーナ

(定義) 主にコクサッキーウイルスA群による口咽部に特有の小水疱と発熱を主症状とする夏かぜの一種である。多くは、コクサッキーウイルスA群2～8, 10, 12型, まれにその他のエンテロウイルスも病原として分離されることがある。

令和4年のヘルパンギーナは、小児科定点医療機関から753人(累積定点当たり報告数14.14)の報告があり、令和3年(753人)と同数で、前年と同様に1.00を超えることはなかった。令和2年(1700人)と比べると、流行の大きなピークは認められなかった(図2-9-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.2倍と高値で推移したが、例年と比べると年間を通じて低値であった(図2-9-1)(図2-9-3)。保健所別では、鹿児島市、指宿、鹿屋の順に(図2-9-2)、年齢別では1歳(36.3%)、2歳(25.5%)、3歳(11.4%)の順に多く、3歳以下の報告数は全体の約85%を占めた(図2-9-4)。

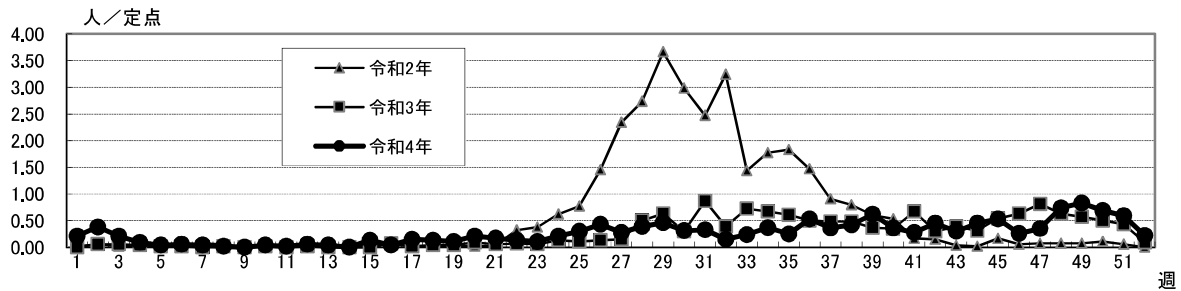


図2-9-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

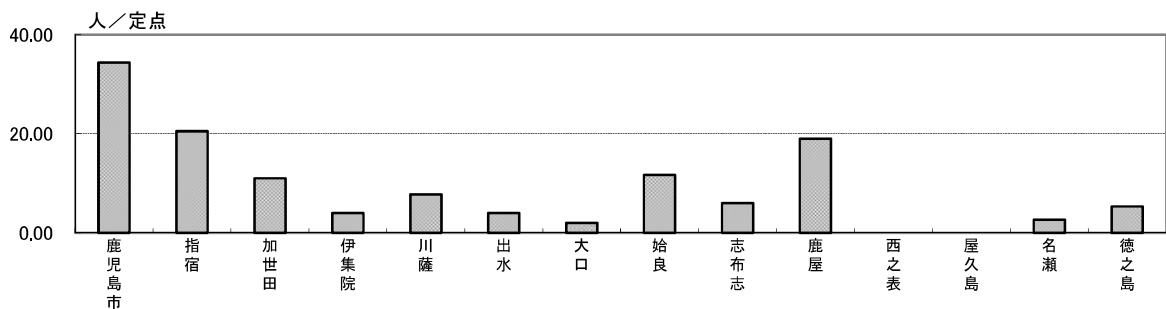


図2-9-2 定点別報告数(令和4年保健所別)

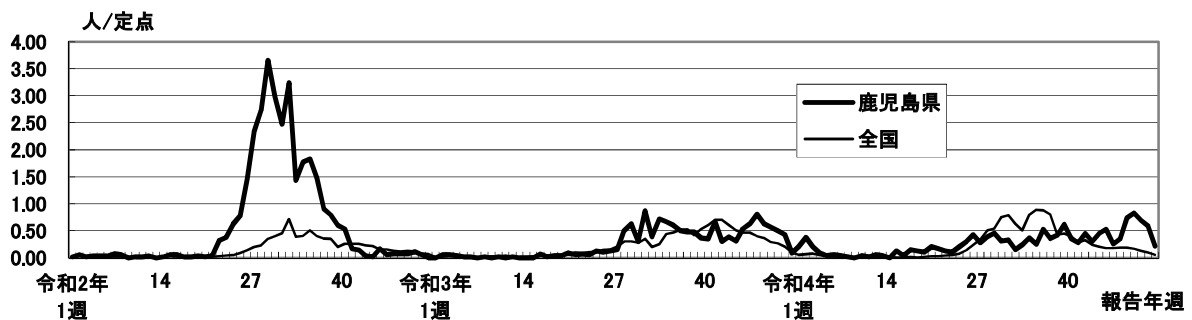


図2-9-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

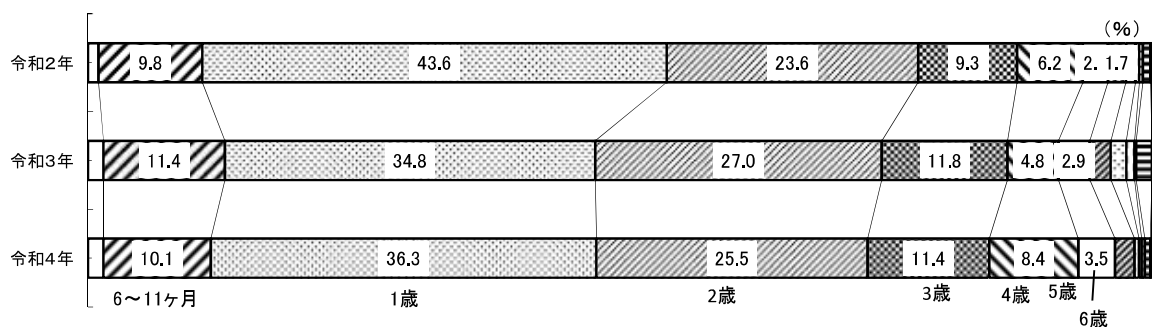


図2-9-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

10)流行性耳下腺炎

(定義) ムンプスウイルス感染により耳下腺が腫脹する感染症である。

令和4年の流行性耳下腺炎は、小児科定点医療機関から112人(累積定点当たり報告数2.10)の報告があり、令和3年(171人)より59人少なく、年間を通して定点当たり報告数が0.10を超えることはなかった(図2-10-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.4倍で推移した(図2-10-3)。保健所別では、指宿、志布志、鹿児島市の順に(図2-10-2)、年齢別では、6歳(19.6%)、4歳(15.2%)、3歳(それぞれ13.4%)、10~14歳(それぞれ13.4%)の順に多かった(図2-10-4)。

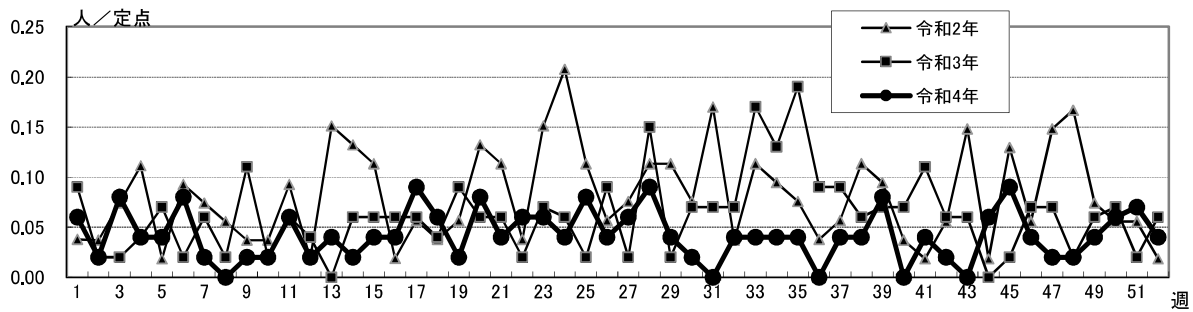


図2-10-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

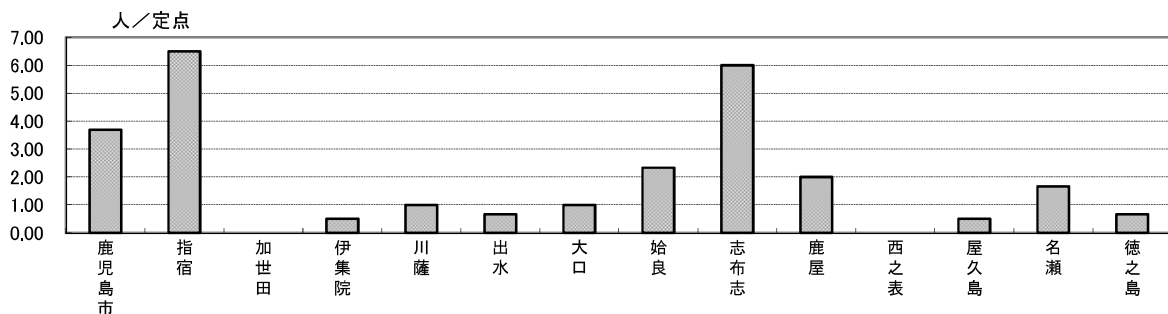


図2-10-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

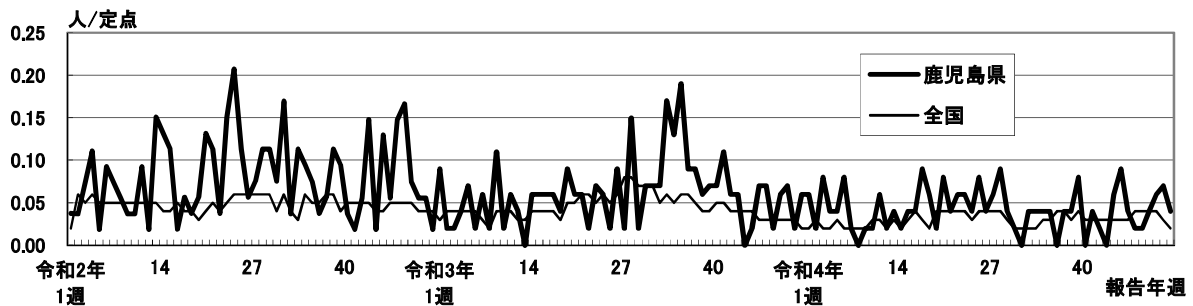


図2-10-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

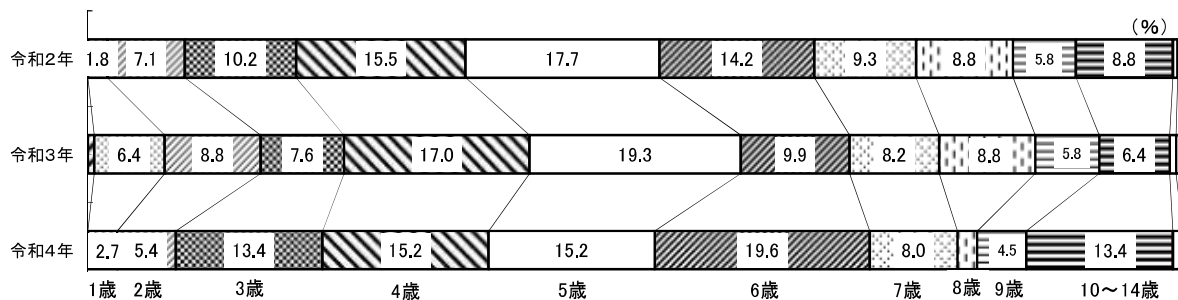


図2-10-4 年齢区別患者発生状況(鹿児島県)

11)RSウイルス感染症

(定義) RSウイルス(respiratory syncytial virus)による急性呼吸器感染症である。乳児期の発症が多く、特徴的な病像は細気管支炎、肺炎である。

令和4年のRSウイルス感染症は、小児科定点医療機関から1379人(累積定点当たり報告数25.90)の報告があり、令和3年(4900人)より3521人少なかった(図2-11-1)。本県は令和3年の後半から令和4年初頭にかけて大きな流行がみられた。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.3倍で推移した(図2-11-3)。保健所別では、大口、出水、鹿児島市の順に多く(図2-11-2)、年齢別では、1歳(36.4%)、2歳(21.2%)、6~11ヶ月(14.0%)の順に多く、1歳以下の報告数が全体の約63%を占めた(図2-11-4)。

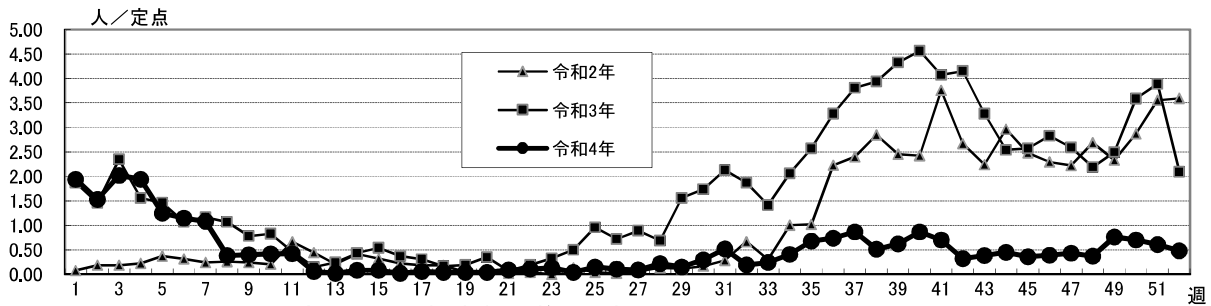


図2-11-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

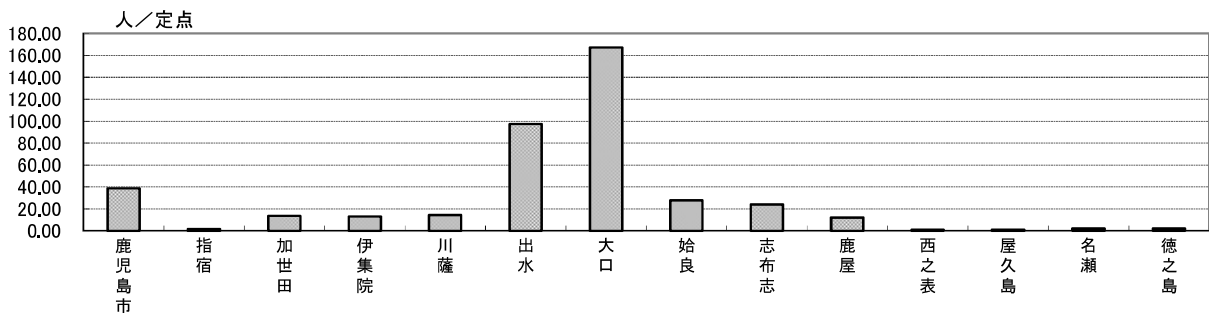


図2-11-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

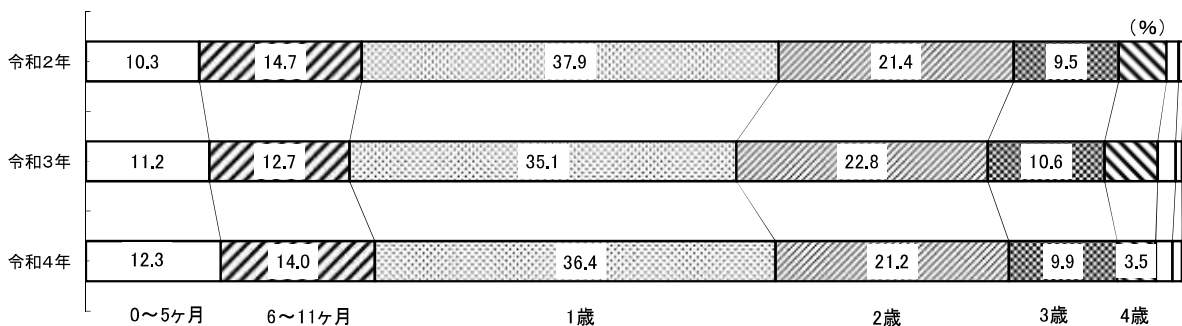
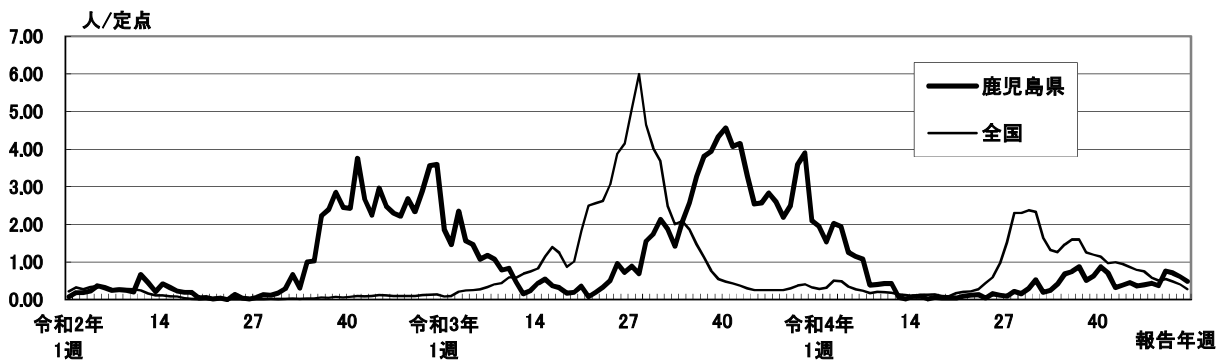


図2-11-4 全国・鹿児島一定点当たり週別発生状況(鹿児島県)